麗しの君よ純情であれ！

海苔男

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
麗しの君よ純情であれ！

【Ｎコード】
Ｎ８４６６Ｋ

【作者名】
海苔男

【あらすじ】
涙目のおささなじみが家におしかけてきたよ！

どうする？

▽　叩きかえす
　　叩きかえす
　　叩きかえす

そんなお話し

「ちゅーして素面でいられる奴にろくな奴はいない」

数分前、家に突然押しかけてきた彼はタバコを灰皿に押し付けながら吐き捨てた。ほほう、とわたしはため息をつく。そこまで話が飛躍する彼の頭と、何本かわからないほどのタバコを抱える灰皿に拍手喝采を送りたい。前者は皮肉な笑みをおまけして。

「だってそうじゃんか！」

ためいきをついたわたしが気にいらなかったらしく、彼は語気を荒らげた。

「なにがそうなのよ」

「だって、意中の相手とちゅーできたらそりゃ嬉しいものだろ！？いつでも！なのに、なのにっ……」

彼は顔をくしゃり、とゆがめた。瞳にうるうると涙がたまってゆく。あえて指摘しなかったけれど、実はあなたが傘立てに傘を立てたあたりから、目が腫れぼったいのに気づいてたんだからね。昨日はさしずめ泣き寝入りインベッドといったところか。

全く、せっかく綺麗な二重瞼が台無しになってしまうじゃないか、とわたしは彼の目じりをぬぐう。

「――うえ」

「うんうん、辛かったねえ」

そのままよしよし、と彼の頭をなでてあぐた。彼は感極まったらしく、しゃぐりあげる。金髪で強面のギャル男が大声で泣きじゃくっている図はなかなか壮観だなぁ、とのん気に思った。

昨日、彼のカノジョの浮気が発覚したらしい。一悶着起こるのは至極当然であり、このカップルも例外ではなかったらしいのだが。話に聞いたところ、カノジョの方はぶすっと黙秘を貫き通していて、彼がわあわあ喚いていたらしい。どんな口げんかしたの、と聞いたら、「俺がひたすら謝れよ！って怒鳴った」だそうで。正論すぎて何もいえない。案外彼にしてはまともなことを口走ったものである。

「でさ、俺が謝ったら許してやるからって言ったら、あんた軽そうに見えて全然硬いからつまんね、だよ？ねえよ！ふざっけんな！」

つまり、バッサリ切られたというわけで。

そういえば最近ちゅーとか【えっちなのはいけないと思います！】しても全然無感動だったしねアイツ！という話になり冒頭に至る。それは浮気に気づかないあんたも大概だ、と突っ込みたいところだが、これ以上泣き喚かれたらたまったもんじゃないな、とあきらめた。

ここはお悩み相談所じゃねえんだよ、と叩き返せたらどれだけいいことか。

自分のお人よしさにめまいがする。

「まあ、大変だったね」

「うん」

「こんどはさ、良い彼女見つけなよ」

「うん」

「あんたがそんな外見だからビッチが寄ってくるわけであり」

「……愛はビッチじゃねえ」

数人の男を股にかけている女がビッチじゃなかったら、世の中天使だらけになってしまう。

「とりあえずさ、金髪はやめよう」

諭すように顔をのぞきこむ。案の定彼は顔面崩壊もいいところになっていた。ぐしゃぐしゃのわやわやである。ティッシュを手渡したら、勢いよく鼻をかむ彼。図々しいのは変わっていない。

「やだ黒髪なんてダサい」

「喧嘩売ってんのか」

かなちゃんは似合うじゃん、としれっと言う彼。わたしは化粧っ気がないので、よく注意されるのだけれど。

「かなちゃんぐれたら俺死ぬ」

「なんで？」

「家行ったら男がいるんだべ？こうやって、な、泣けないじゃん」

どもって目をそらす彼。女の子の胸で泣き喚いていたことに今更恥じらいを感じているらしい。おかしくて笑ってやった。

時々、俺自立しなきゃ……とつぶやいているから気にしていないわけじゃないとは思ったが、口に出すとはよくやった。そのまま現実を見つめ続けてほしいと思う。

「かなちゃんがそのままでいるようにがんばらなきゃね」

「その前にだまされない程度の頭のよさを手に入れてくれ」

バカな子ほど可愛いわけがない。鬱陶しい。家に連絡なしで来ないでって言ったでしょ、というと、俺浮気されるの予想できるほどエスパーじゃないし、と返された。そうじゃねえよ、と口内で毒づく。説明しても疲れるだけなので言わないが、本当に。

「いい加減にしてくれよ」

「やだ」

俺の支えはかなちゃんだけ！と悪びれもせず笑う彼に腹が立って、ちょいちょい、手招いてみせる。彼は昔から純情だ、そりゃもう詐欺だというくらいに。金髪に染めたときはびっくりして、ぐれてしまったかと少し残念に思ったけれど、全然そんなことなかったし。だまされまくりだし。

「見返してやりたかったんだ」と泣きにきたのはいつだっけ。小学校からの付き合いで、泣きにうちにおしかけてくるのも小学校からで。

素直に寄ってきた彼を思い切り平手打ちしてやった。

目をぱちくりさせる彼を睨みつけた。自分ができる限りの冷たい表情をして、ため息をつく。わかるわよね、と言外に乗せてまた睨んだら、彼は案の定涙目になった。本日二度目である。

「……ごめん。もう来ない」

「ぷ、」

うなだれ方が捨てられた子犬みたいで、吹いてしまった。あと、こいつの察しの良さにも。わたしのような大根役者の演技を見抜けないから、頭はまだまだ弱っちいけど、やればできるんじゃないか。

しばらくポカンとしていた彼はようやく状況を理解できたらしく、涙目でにらんだ。怖くない。だって彼だから。

「かなちゃん性格悪い……」

君も大概だ。

「ふぅん。そう思うんだったらもう家にこなかったらいいんじゃない？」
「ふざけんな……マジ死ねよ」
「思ってもいないことを口走ってんじゃねえよ」
「こっちの台詞だし！もう、通いつめてやる……」
「うわあごめんごめんほんとそれやめて本気で彼氏できなくなっちゃう！」
「そんなの俺がなれば大丈夫じゃん」
「ほんと？じゃあちゅーして」
「え！？していいの！？」

一泊。

「食いつきようにドン引いた……」
おまえ、そのつもりがあって仮にも女の子の家に押しかけてたの？最低野郎だな、と吐きつけたら彼は少し考え込んだ。
「や、なんかいま冷静に考えたら……アリ！」
「失礼だと思わんのかねあんたは……」

うふふ、と彼は笑って。ため息をついてもうやだこいつ……と顔を覆うわたしに、そういえば、と彼はのたまった。

「かなちゃん男性経験は？」
「てめえのせいでありまんが何か」

ふざけんな責任取れよ、とまあ自暴自棄になって叫んでしまったわけだが、勢いって怖い。反省している。

じゃあ責任取る！と無邪気に、しかし理不尽に言い放った彼は、わたしの手首を鷲掴んで顔に寄せて、突然の出来事に反応できずに

いたわたしの唇に食いついた。

ズームアップされた顔に見たのは純粋とは言い難い笑みでした、なんて。ふざけんな、こんなオチわたしは認めねえ。

「……奪っちゃった」
「ふ、っる」
「真っ赤。性格悪いけどろくな奴だねかなちゃん」
「……おまえはろくでもねえよ」

さっぱり動揺していない彼が心底憎たらしくて仕方ない！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8466k/

麗しの君よ純情であれ！

2010年10月13日08時48分発行